

序にかえて

リレーランナー

女子栄養大学教授 山口文芳

いまから40年近くまえ、坂戸キャンパスと東上線との間には、まだ砂利道が残っていた道路を挟んで、アカマツを優占種とした雑木林と東京教育大学の農場がひろがっていた。木枯らしのころ、どんぐりをつけるコナラやクヌギが落葉すると、枝や幹ごしに東上線のオレンジ色の車体が見えかくれた。戦時中東上線の北側には、陸軍の飛行場があった。そしてそのあと地は、農地付きで四角に区画された。道沿いや区画の境に植えられたソメイヨシノやアカマツ、それにアズマネザサなどのやぶが、吹き抜ける北風から人や家や畑を守った。

4時限後の16時40分にスタートして90分、学生と歩くキャンパス周辺の野外巡検で、出会う人は畑や道で2～3人、車はゼロであった。晩秋の帰り道は、畑と木々の向こうの坂戸のまち、はるか向こうの西武蔵の山々や空を紅く染める夕陽のなかであった。そして夜のキャンパス北方には、明かりが2～3見えるだけであった。

時代は変わり、農園はキャンパスの東から西へ、研究室は、旧体育館の2Fの西側“ゆれと西日の間”からスタートし、旧館で数回さらに旧寮のキャフやいまのアリーナ付近と転々とし、現在の上広谷へ農園、研究室ともに移った。そして坂戸へ来た当時多かったヒマラヤスギ、クリ、ウメ、チャ、ムクノキなどの時代は終わった。

校舎の東側の農園との境に風垣のように植えられているシラカシは、おもに北～西のへいぎわに、樹間10m、へいから5mの間隔で植えられた。坂戸キャンパスを風、ほこり、音、光、振動、火の粉、排気ガスなどから守り、野鳥へは餌やねぐらを、人の眼や気持ちには安らぎを……と思ったのである。そしてさらに光合成と蒸散作用、他種との共存のうえで、武蔵野に育ってきた常緑のシラカシは、重要な木と考えたのである。

さて、ものところろ、そしていのちを大切にす大学の植物研として、次のようなことを考えてきた。まず講

義は植物学、食品学そして生態学をマイルドブレンドしたもの、そしてさらに、人々のくらしを考えあわせてきた。次に農園や農作業は創設者の香川綾先生の目標にあわせ、自分の力で畑作りから栽培・調理、そして評価することを目指した。無農薬の農園を舞台として、食材の特性をいろいろな角度から見て、認識していけたらと思った。

学園や時代の移り変わりで、現在は希望者優先で、自分の畑を持ち、野菜やハーブを栽培している。そしてジャガイモ栽培を中心とした3月スタートのジャガイモ組、4月からはじまるカンショ組、そして10月からはじまる冬野菜組などがあり、学年、学科を超えた形で行った。また農園の維持・管理や講義に必要な材料の準備などには、できるだけサポーターとしての学生が参加できるようにした。しかし場所・時間割、学外実習や天候などいろいろな問題点もある。しかし農園や農作業で、他学年・他学科の友人を得た学生は少なくなかった。三つ目の野外巡検では、キャンパス周辺、東上線沿線、そして東京とその周辺を歩きまわった。遊びやショッピングの場合とちがいで、なれるまでは疲れる感じであった。でも植物や地形と歴史、そして人々のくらしについて、一緒に歩いて見たり、コメントしたりすることは大事なことと思った。同じ種類の植物でも形、大きさ、場所、そして人との関わりで変わることの理解を目標とした。いつか同じコースを友人や家族で歩いてくれたら……と思っている。

以上30数年、自分とその周辺は大きく変わった。変えて良かったもの、変えなくても良かったもの……。それらのことを前向きに考えていかなければならない。学生や卒業生がキャンパスへ来るたびに、のびのびと葉をひろげ、枝を伸ばしている木を見上げながら、むかし、いま、そして未来を思う坂戸キャンパスができていくことを想いながら……。